続 徒然つれづれ

マンションの美術館

桑野　巍

会社を定年退職した友人が住み慣れた戸建て住宅を処分して、駅前の新築分譲マンションに引っ越した。戸建て住宅は家庭菜園もできる小庭があり環境も悪くなかったが、最寄りのＪＲ駅まで徒歩約25分と不便だったことと二人の子息がそれぞれ独立したので決断したというのだ。もちろん奥方と相談しての転居だ。友人によると、田園の風景も向こう三軒両隣りなど環境も悪くなかったが、歳を重ねると住居は交通至便の場所に限るというわけだ。マンション住いは初めてというが気分も新しくなって満足しているらしい。

彼の転居だけでなく、いま大阪では都心にマンションが林立し、新しい“人口回帰”の現象が起こっている。元気な彼は「これから自由な日常生活を楽しむよ」と幸せそうな笑顔だったが「案外気遣うことも多い」とも話し、約一年間のマンション生活を振り返り、その気遣いの中身を話してくれた。

マンションは８階建てでオートロック方式、83世帯が住んでいる。新聞朝夕刊は１階のポストまで取りに行かなくてはならないので不便、宅配便の受け取りも不便という。単独の自治会はまだないが管理組合はある。管理人、清掃人はいずれもパート従業員が配置されているが、あまり頼りにならないという。

一年前の入居時に管理組合の会合があったが少人数の“寄り合い”だった。場所はマンション一階のゲストラウンジというか15畳ほどの交流スペースで住民はロビーと呼んでいるところ。彼はこの会合に出席して「このロビーは殺風景なので壁に絵画をかけたら」と提案した。応接セット２脚はマンション建設者が寄贈してくれたが、これ以上のサービスは無理と思って彼はアマチュア画家の作品展示アイディアを披露したのだ。

ところがこの提案には反対意見が多かった。壁にかけてある絵画が突然落ちてきたら子供がけがをする恐れがある、というのが反対理由だった。折角の彼のアイディアはこの時には実らず、彼は意気消沈した。しかし彼は挫(くじ)けず「マンションの共用部分にうるおいを」を実現させるために全世帯に「絵画について」のアンケート用紙を配布することを思いついた。「絵画を展示して住人たちが芸術に触れることは悪いことではない。経費をかけずに実現させる方法がある…」とアンケートの前文で訴えた。

アンケート調査は面倒だが、これを回収したところ、多くの住人たちの態度が変わったことがわかった。ムードの変化を読みとった彼は問題点の整理に取りかかった。絵画をどう調達するか、協力者はいるのか、何点が適当か、住人たちの好き嫌い、展示期間はどの程度が適当かなどを真剣に考えた。そして街の絵画教室や同好会数カ所を自ら訪問、趣旨を説明し協力を要請した。

絵画教室や同好会は彼の熱意と行動力を評価し「協力します」が大半だった。「皆さんから約一ヶ月間作品を無料でお借りしたい。保険はかけませんのでご了承を」とアマチュア芸術家にお願いしたわけだ。彼は若いころに企業で培った営業マインドを地域社会でフルに発揮したのだ。

彼はマンションに入居して半年間、自分のために、他の住人のために、そして地域の健全な発展のために努力を惜しまなかった。「貴重で有意義な経験をしたよ」と彼は言うが、私にはとても真似ができないと思った。マンションの交流スペースの絵画は水彩画３点、油絵５点の展示がいまも続いており、住人たちは彼のアイディアや実行力を評価したうえ「みんなが“にわか美術評論家”になった」と喜びをかくさない。また地元の絵画愛好団体もアマチュア芸術家も「作品を展示してもらって、私たちも張り合いが出てきた」との感想をもらしているそうだ。

ある雨の日、子供たちが学校帰りに交流スペースに集まった。子供たちはかばんを右方向に投げ出し、雨傘は左方向に放り投げ、ワアワアふざけ合いながら絵画を鑑賞している姿に出食わした彼は「どうや、この絵は素晴らしいやろ」と呼びかけてみた。子供は「きれい。今度はぼくらの絵も陳列して」と言った。荒んだ世相の中で、子供たちの間でも話題になっていることに彼は満足気だった。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）